

# 岡崎 〈都市の再生〉



平安時代の六勝寺（平安京復元模型）

左京区南端に位置する岡崎は、神楽岡の南部丘陵地帯にあたり、平安時代前期より風光明媚な地として貴族の別荘が営まれました。また一方では都人の葬送の地としての役割もはたしていました。ところがこのような景観は、白河天皇による法勝寺の建立以降、大きく変貌するのでした。平安時代末期には法勝寺をはじめ、堀河天皇の尊勝寺、鳥羽天皇の最勝寺、待賢門院の円勝寺、崇徳天皇の成勝寺、近衛天皇の延勝寺が御願寺として創建されました。この六勝寺（写真）のうちで、とりわけ法勝寺の八角九重塔は高さ八十一呎の巨大建造物で、圧巻の美しさを誇っていました。かくして白河院政の政庁の所在地であったことから、この一帯は白河とも呼ばれ、平安京とは別の都市機能をもった地域として栄えました。

しかしながらこの繁栄も、中世の戦乱や天災によって崩壊していきました。室町時代には岡崎郷と呼ばれるようになり、東山十郷のなかの一郷として扱われています。江戸時代においては、村内は上・中・下岡崎及び黒



第四回内国勸業博覧会の図〈明治 28 年 (1895)〉

谷門前の四か所に分かれており、多くの領主たちによって支配される京郊農村の姿と化していました。

そして明治時代を迎えると、再び大変革が起こります。始まりは疏水事業による区域の整備からでした。続いて最大級のもの、明治二十八年（一八九五）平安遷都一〇〇年記念による平安神宮の建立。併せてその周辺で大々的に行われた第四回内国勸業博覧会の開催でした（写真）。それはもう京都あげてのお祭り騒ぎとなり、経済効果も大変なものでした。岡崎の地は再び脚光を浴び、新たな歴史を刻むこととなります。博覧会跡地には動物園・公園・図書館・勸業館・美術館などの文化施設がどんどん建てられて、岡崎はまさに京都の新しい顔となっていました。

京都市民の一大文化ゾーンとして、岡崎の大きな使命は今後も続いていくことでしょう。

# 南禅寺門前〈門前町の風景〉

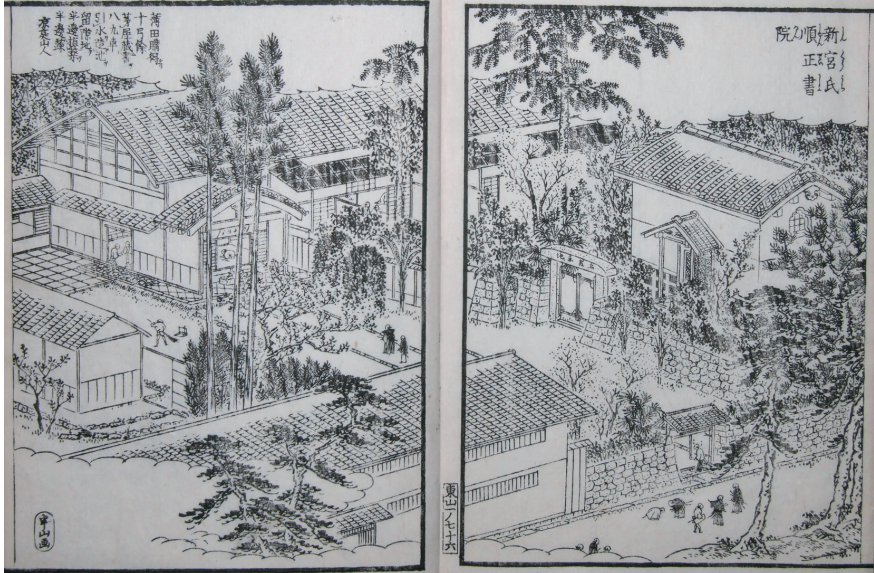


南禅寺門前の瓢亭と丹後屋〔花洛名勝図会〕元治元年（1864）刊行）

明治元年（一八六八）、南禅寺門前・禅林寺門前・光雲寺門前が合併して南禅寺村がつくられました。同二十一年（一八八八）南禅寺町となり、昭和四年（一九二九）には左京区に編入されて現在に至っています。古代から中世にかけては、貴族の山荘や寺院が建ち並ぶ地域でした。なかでも九世紀中頃以降は禅林寺が広大な敷地を占めていましたが、十三世紀中頃の南禅寺創建以降は、当地域に大きな変化をもたらしました。

南禅寺は室町時代に將軍足利義満によって京都五山の上位に位置づけられ、公家や武家の深い帰依とともに発展しました。おのずと栄えた寺院の門前には集落が形成され、南禅寺門前としての賑わいをみるようになったのです。また併せて京都と東国を結ぶ主要街道沿いでもあったため、人や物資往来の頻繁な集落でもありました。

江戸時代に至ると、南禅寺界隈は一層門前町としての風格を形成しました。茶店が並ぶ風景は、地誌にも描かれています（写真）。現在も当時と同じ場所で営業を続ける「瓢亭」は、『花洛名勝図会』では「瓢亭の煮拔玉子は近世の奇製なり」とて、酒客あ



順正書院（『花洛名勝図会』）

まねくこれを食悦す」と絶賛しています。隣接の「丹後屋」については「丹後屋の湯豆腐ハ、古よりの名物にして、旅人かならず是を賞味し」とあります。なお丹後屋の場所には、明治二十九年（一八九六）に山県有朋の別荘「無鄰菴」が建てられました。また江戸時代後期には、医師の新宮涼庭が医学校「順正書院」を開いています（写真）。建物は現在湯豆腐の店「南禅寺順正」として使われています。

明治時代を迎えると、琵琶湖疏水やそれに伴う水路橋建設などによって、景観は変貌しました。しかしその遺構たるや現在は歴史遺産として継承されています。古代から明治の激変を経て今に至るまで、境内や門前の風景は地域社会にしっかりと根付いているのです。